

【書評論文】

三つの『純粹理性批判』新訳

佐藤 慶太

はじめに

二〇〇四年、カント没後二〇〇年を記念して多くの学会、学術雑誌でカントを特集した企画が組まれたが、この年を前後してカントの名著『純粹理性批判』(*Kritik der reinen Vernunft*)にも新たに三つの邦訳が公刊された。日本では、これらを除いてすでに六つ(改訳も含めると七つ)^(一)の『純粹理性批判』の翻訳が公刊されている。新たに公刊された三つの翻訳を加えることで『純粹理性批判』の翻訳は九つ(改訳を含めると一〇)を数えることになったが、この事実からだけでも、日本で『純粹理性批判』が常に念頭に上る哲学

的古典としての地位を長く保ってきたことが伺われる。

さて新たに公刊された『純粹理性批判』邦訳だが、第一は、有福孝岳による翻訳で、一九九九年から刊行が開始された岩波書店『カント全集』(有福自身がこの全集の編集委員を務めている)の第四、五、六巻を構成するものである(上巻は二〇〇一年、中巻二〇〇三年、下巻二〇〇六年刊行。なお第六巻は『プロレゴメナ』(久呉高之訳)も所収)(以下有福訳と略記)。

第二は宇都宮芳明監訳の二巻本で、以文社から二〇〇四年に上下巻があわせて公刊された(以下宇都宮訳と略記)。これは本文訳のあとに注解をおく構成をとっており、同一

の構成を採るこれまでの宇都宮の訳注書のシリーズ（『道徳形而上学の基礎づけ』・『実践理性批判』・『判断力批判』）に属するものと言える（この三つの訳注書は長らく絶版だったが、『純粹理性批判』新訳に合わせて新装版として公刊された）。ただし『純粹理性批判』は、宇都宮一人による翻訳ではなく、宇都宮を責任者とする北海道大学出身者のグループ（宇都宮芳明・鈴木恒夫・田村一郎・新田孝彦・島崎正躬）の共同作業であるし、後述するように、これまでの宇都宮による訳注書とはいくつかのスタイルの違いもある。

第三は二〇〇五年に平凡社ライブラリーから三冊本として公刊された原佑訳である（以下原訳と略記）。これは一九六六年から一九七三年にかけて公刊された原佑訳の『純粹理性批判』（これは原が編集主幹を務めた理想社刊行『カント全集』第四、五、六巻を構成するものだった）を、渡邊二郎を責任者とする東京大学出身者のグループ（渡邊二郎・量義治・高山守・木坂貴行・菊池恵善・円谷裕二・古川英明・湯浅正彦）が改訳を施したものである。渡邊二郎のあとがきによれば、改訳にあたり、いくつかの箇所で修正が加えられたが、基本的には原佑の訳語と訳し方を維持しているの

で、この翻訳は「本体においてはあくまでも原佑訳」で、「補訂を加えて成ったものである点は、表題扉の裏側においてのみ記されている」。「序論」を例とすると、文章全体の書き換えにおよぶ修正は二点で、そのほか時制の修正や副詞のとりかたのこまかな修正がおこなわれているが、訳語の変更はほとんどない。

すでに明らかなように、これらの邦訳には、訳者の人数、新訳か改訳か、に関して違いがあるが、訳語の選択、文章の訳し方などに関しても相違がある。全体を通じての比較検討はできないが、以下では「序論（Einleitung）」を中心に三つの翻訳を比較して、できる限りそれぞれの特徴を浮き彫りにしてみたい。本稿の構成は次のとおりである。

- 一 各訳の全般的特徴、および訳語の選定について
- 二 特定箇所での各訳の比較
- 三 訳文と解釈との関連
- 四 結論と提言

一 各訳の全般的特徴、

および訳語の選定について

まず全体の構成と訳語の選定に関して比較を行ってみた。有福訳は、『純粹理性批判』の翻訳、『純粹理性批判』(第一版)補遺の翻訳、解説、索引、からなるが、本文に付された注と解説の詳細さ、校訂注で参照している版の数ではこれまでの翻訳の中でも群を抜いている。解説では、『純粹理性批判』本体の説明とならんで、ドイツ觀念論から現代に至るまでの様々なカント解釈について紹介がなされており、参考文献目録としての役割も担う。加えて特徴的なのは、『序論』のように、第二版で部分的に修正されたパートを、それぞれ別々に訳出している点である。これまでの翻訳では、『序論』の版異同は注で指摘されることが多かった。煩瑣な向きもあるが、この構成によってそれぞれの版の「序論」を独立したものとして読むことができる。また有福訳の索引は、例えば「意志 Wille (希 boulsis, 羅 voluntas)」という風に、必要に応じて、事項のあとにそ

れに対応するギリシア語、ラテン語を提示している点で独特だが、このことは訳語の選定方法と無関係ではない。つまり有福訳において特徴的なのは、語源への遡及が訳語決定の主導的な方針となっている、ということだ。例えば判断の三つの様相 *problematisch, assertorisch, apodiktisch* はこれまで蓋然的、実然的、確然的(あるいは必当然的)等と訳されてきたが、有福訳では蓋然的、主張的、論証的としている。つまり *assertorisch* をラテン語の *asserere* (主張する)に、*apodiktisch* をギリシア語の ἀποδεικνύειν (論証)に遡って訳語を決定しているわけだ(これと対照的なのが原訳。原訳は *apodiktisch* についてギリシア語の語源を確認した上で「カントにおいては、要するに：必然的で確実であること」(上巻、五三三頁、訳注)として「確然的」とする)。その他 *Demonstration* は「明示的論証」と訳されるが、その理由は「*Demonstration* (ラテン語 *demonstratio*) はもともと *de* という分離の前のつぎりの前置詞と「示すこと、指示すること」(*zeigen, weisen*)」を意味する *monstrare* との合成語に由来」し、「或るものから(*de*)切り離され、際立った仕方で明示すること」(*hinweisen*,

deutlich machen)を意味する」(下巻、三九五頁、訳注)と説明されている。この訳語選定などに上述の方針が現れているのが分かる。

索引に収録されている基本術語に関しては一貫性が保たれているようだが、索引に収録されないがカントが一貫した意味を与えている語に関してはブレも見られた。序論に限っていうと、有福訳では *verworfen* をある箇所では「錯乱した」と、別の箇所では「混乱した」と訳しており一貫性がない。*verworfen* はラテン語の *confusus* に対応する語で、これは「判明 (distinctus)」の反対概念である。いわゆる明晰・判明 (*clarus・distinctus*) がデカルト以来の近世哲学を理解するうえでの最重要概念であり、カントもそのことを念頭におきつつこの語を用いているのだから、一貫した訳語を当てるべきではないだろうか。また有福訳では *Analysis* のドイツ語表現である *Zergliederung* を、「分解」と訳したり「分析」と訳したりしているが、このように訳し分ける理由も特に見当たらなかった。後述するが、有福訳は原文に忠実な訳出を徹底するタイプなので、その分これらの訳語の不統一が目につく。

次いで宇都宮訳だが、その全体は『純粹理性批判』の翻訳、区切りごとに付け加えられた注解、『純粹理性批判』解説への手引き、巻末索引、からなる。特徴的なのはこれまでの宇都宮の翻訳と同様に、区切りごとに置かれる注解だが、この注解の性格はこれまでの宇都宮によるカントの著作の翻訳とは少々異なる。これまでの宇都宮訳では、本文をまず逐語訳し、その訳を読んだだけでは分かりにくい内容を注解で敷衍する、というスタイルが採られており、注解はほぼ一段落ごとに付け加えられていた。しかし『純粹理性批判』の場合は、それぞれの節全体の理解を助けるために訳注が付されている。例えば『純粹理性批判』の最大の難所である「カテゴリーの超越論的演繹」には、第二節から(第一版ではいわゆる「三段の総合」から、第二版では第一五節から)演繹のおわりまでの箇所に、第一版、第二版を一括して一つの注解が付されているだけである。要するに『純粹理性批判』の宇都宮訳は「読み通すには、かなり根気が必要」(あとがき)なこの大著をどのように読者に読ませるか、ということの基本方針として作られており、注解も各パートの全体的な理解に寄与するべくつけられて

いるのである。

この基本方針は版異同の取り扱い方や基本概念の訳出にも反映されている。例えば「序論」では本文として第二版の全文を掲げて、注で「大幅な変更があった部分だけを示し、細かな異同について一々指摘することは省略」する。基本概念の訳出について宇都宮訳は、基本的にこれまでの翻訳で用いられた訳語の中から適切なものを選択するという形をとっているようだが、特徴的なものは、一つの訳語にとられずに文脈に応じて柔軟に訳語を選んでいる、という点だ。これは読みやすい訳文をもたらす場合もあるが、『純粹理性批判』全体の連関を覆い隠してしまうことにもなりかねない。例えば宇都宮訳では、カントの「存在(Sein)」概念を理解する上で鍵となる概念 Position と、それに対応するドイツ語固有の表現 Setzen が、弁証論の神の存在論的証明批判 (A592ff./B620ff.) ではそれぞれ「定立」と訳されている一方で、分析論の「経験的思考一般の要請」では Position が「位置づける」(これは高峯訳の踏襲と思われる)、Setzen が「設定する」(上巻、三三三頁)と訳されている。このような不統一は『純粹理性批判』における神の存在論

的証明批判と「経験的思考一般の要請」との連関を覆い隠すものであるし、「経験的思考一般の要請」の箇所の翻訳の仕方では、Position の哲学史的文脈はもとより、Position と Setzen とが同一の事柄を意味すること自体が見落とされざるをえないだろう。このような不整合は宇都宮訳が五人による共同作業であるということにも起因するのだろうが、全体的な訳語の統一性に関してもっと気を配るべきだったのではないか。また索引に収録されないがカントが一貫した意味を与えている語を、統一的に訳していない箇所も目に付く。例えば「反省概念の多義性」の後半部 (A280ff./B337ff.) で、カントは「 $\sim$ を捨象する (abstrahieren von $\sim$)」という表現を七回も用いてライブニッツを批判している(「捨象」の問題はカントが一七七〇年のいわゆる教授就任論文でも登場する重要なトピックである)。宇都宮訳では、abstrahieren von $\sim$ を「捨象する」の他に「捨て去る」と訳出しており、これではカントが徹底的にこの概念に定位してライブニッツを批判したことが見えない(有福、原は一貫して「捨象する」と訳している)。

最後に原訳だが、これは『純粹理性批判』の全訳、『純

粹理性批判』(第一版)補遺の翻訳、原佑による解説、事項・人名索引によって構成されている。索引は理想社版では欠如していたが、このたび新たに作成され、収録された。原訳の構成上の特徴は、第一版と第二版で異同のあるパートが、第一版と第二版をそれぞれ各頁の上段と下段に分けるという仕方では組まれているという点だ。第一版と第二版を比較しつつ読み進めたい読者にとっては、原訳の構成が便利である。

訳語に関して言うと、原は一九六六年の段階ですでに現在でも通用するような訳語の選定を行っていた。例えばそれまでの翻訳では「先験的」と訳されていた *transzendental* を初めて「超越論的」と訳したのは原訳である。そのため改訳において訳語にあまり手が加えられていないにもかかわらず、特に古臭い感じは与えない。原訳で特徴的なのは、思惟 (*Denken*)、心性 (*Genut*)、覚知 (*Apprehension*) 等の仏教由来の訳語を避けて各々に思考、心、把握というより近づきやすい訳語を採用したことや、「真とみなすこと (*Fürwahrhalten*)」や「真らしさ (*Wahrscheinlichkeit*)」などの直訳調な訳語を効果的に用いた点ではないだろうか。確か

に「真とみなすこと」や「真らしさ」という訳語は簡潔さに欠ける向きもあるが、*Fürwahrhalten* が「判断の主観的確実性」を意味するかぎりにおいて、「真 (*wahr*)」の意味を表に出したこの訳語は「意見」(天野、篠田、高峯)や「信憑」(有福、宇都宮)よりも事柄を適切に表しているし、また *Wahrscheinlichkeit* に「真らしさ」を当てる訳は、「不十分な根拠によって認識された真理」(A293/B349)というカントの特徴づけを生かした上で、*problematisch* (一般に「蓋然的」と訳される)との訳し分けにも成功している。

原訳について渡邊二郎は「カントの基本的な諸術語には、一定の訳語を当てはめて、これを動かさず、首尾一貫した形で、カントの思考世界を、日本語で追思考をすることが出来る訳書」(あとがき)と評しているが、このことには間違いがない。今回検討した限りでは、三つの翻訳のなかで訳語が最も一貫しているのは原訳だった。たしかに訳語の一貫性は場合によっては読みにくさの原因にもなりうる。例えば *denken* を一貫して「思考する」と訳出する原訳よりも、文脈に応じて「考える」という訳語を当てる宇都宮訳のほうが、読みやすさでは勝る。しかし『純粹理性批判』

のような書物の場合、少なくともカントが自覚的に用いている語を一貫した仕方です。訳すことは、読者が各パート相互の連関や、カントと他の哲学者との関係を読み解くために最低限必要なことではないだろうか。

二 特定箇所での各訳の比較

次に文章の訳し方に関して、三つの翻訳を比較検討してみたい。基本的な傾向として、有福訳は原文の構造を維持してできるかぎり忠実に訳すが、ドイツ語でピリオドがない箇所にも積極的に句点をうって全体の構造をとりやすく配慮する。宇都宮訳は、文章の構造、訳語の選定、名詞の数の訳出などはそれほど忠実ではないが、読みやすい日本語を目指している。従来の宇都宮訳は、極めて厳密な翻訳が特徴的で、その「一語一語対応、一文一文対応の原則」は「普通の日本人がなんども読み直さなければならぬ文章」と批判の対象になるほどだが、⁽¹⁾『純粹理性批判』の宇都宮

訳にはそれは当てはまらない。訳注と同様に、本文の訳出も、従来の宇都宮訳とは性格が異なるわけである。原訳については、渡邊二郎の「カントのドイツ語表現を、忠実にその原文の流れのとおりに訳出し、長い文章をそのまま邦訳して、それでいて、それに従って読み下していけばカントの主張がそのままゆつくりと咀嚼することができる」(あとがき)という言葉が、その特徴をよく表している。では三者の翻訳を第二版序論の一部に即して具体的に比較してみよう。以下で取り上げるのは、カントが「純粹理性の本来の課題」を「アプリアリな総合判断はどのようにして可能か」という問いとして提示した上で、ヒュームに言及する箇所である(B20)。カントは、ヒュームの主張によれば全ての形而上学が単なる迷妄に帰着すると述べた後、その文章全体に係る長い関係代名詞節を使ってこう続けている。

..., auf welche, alle reine Philosophie zerstörende, Behauptung er niemals gefallen wäre, wenn er unsere Aufgabe in ihrer Allgemeinheit vor Augen gehabt hätte, da

er denn eingesehen haben würde, daß, nach seinem Argumente, es auch keine reine Mathematik geben könnte, weil diese gewiß synthetische Sätze a priori enthält, vor welcher Behauptung ihn alsdenn sein guter Verstand wohl würde bewahrt haben. (B20 原文)

ヒュームは、もし彼がわれわれの課題にこの課題の普遍性という点で着眼したならば、すべての純粋哲学を破壊するそのような主張には至らなかつたであろう。なぜなら、そのときには、ヒュームは、彼の議論に従えば、純粋数学は確実にア・プリオリな総合的命題を含むという理由で、いかなる純粋数学も存在することはできないであろうということを洞察したのであるからである。そうだとすれば、このような主張に対してヒュームを彼の健全な悟性が十分に保護したのである。

(有福訳)

だがもし彼が、われわれの課題をその一般性において見据えていたら、一切の純粋哲学を破壊するこうした

主張に氣をよくすることは決してなかつたであろう。なぜなら、その場合には彼は、彼の論法によると、純粋数学も存在できないことを悟つたであろうからで、と言うのも、純粋数学は確実にア・プリオリな総合的判断を含むからであり、そうなると思われた知力は、おそらく自分をそうした主張から護つたと思われるからである。(宇都宮訳)

彼が私たちの課題をその普遍性において念頭においていたなら、彼は、すべての純粋哲学を破壊するそのような主張には、けつして思いつかなかつたであろう。それというのも、そのときは彼は、純粋数学がア・プリオリな諸総合的命題を含んでいることは確実であるゆえ、彼の論拠にしたがえば、いかなる純粋数学でさえも存在しないということを、洞察したはずであり、そうだとすれば、彼の健全な悟性がそのような主張をしないよう彼をおそらく守つたであろうからである。

(原訳)

まずこの箇所の有福訳をみると、代名詞で表されるものを厳密に訳出していること、接統法第二式の動詞を徹底して「…あろう」と訳していること、原文の語順をできるかぎり日本語にも反映していることなどが指摘できる。代名詞の内容や接統法第二式のこのような訳出は厳密ではあるが、「われわれの課題にこの課題の普遍性という点で」とか「…であろうということ洞察したであろう」という表現は少々冗長な感がある。有福訳は序論の他のところでも接統法第二式の文章をほぼ「…あろう」と訳出しているが、接統法第二式にも幾つかのニュアンスがあるから、もう少し工夫があってもよいのではないだろうか。

宇都宮訳は三つの中で最も柔らかい感じを与えるが、*mit* *gefallen* *wäre* に「気をよくする」をあてゐるなど、あまり原文にこだわらずに訳していることが目に付く。また後半の *sein guter Verstand* が、他の二つの翻訳とは異なり、「彼の優れた知力」と訳されている（これは「彼の秀でた理會力」とする天野訳を参考にしたものと思われる）が、この訳出には疑問がある。この語は『人倫の形而上学』でも「よき分別」、すなわち「常識」という意味で用いられており

(vgl. VI 481) カントがよく用いる *gesunder Verstand*（これは通常「常識」や「健全な悟性」と訳される）と同一の意味をもつものとして理解すべきである。*gesunder Verstand* は *common sense* に対応する語として、カントとイギリスの哲学者たちとの関係を考えるうえでも鍵となる概念である。このような内実を持つ語を「優れた知力」と訳しては、文章の奥行きを損なうことにはならないだろうか。

原訳では、（この箇所ではそれほど際立っていないが）カントの文章に区切りがない場合はなるべく文章をきらずに訳出している。接統法第二式に関しても「…あろう」、「…はず」としたり、必要なければ訳出しなかったりと、訳し方に工夫があり、有福訳より読みやすいように思われた。原訳は、約四〇年前の翻訳を下敷きになっていることもあって、箇所によってはやや古風なところが目に付くが、他のものと比べて目立つわけではない。ただし、複数形をあくまで丁寧な「諸々」とする原の訳し方は、場合によっては読みにくさの原因となるかもしれない。

三 訳文と解釈との関連

これら三つの翻訳はどのようなカント解釈を前提にしているのだろうか。解説での『純粹理性批判』の最重要概念の一つである「超越論的 (transzendental)」についての説明を手掛かりに、それぞれの翻訳者（宇都宮訳の場合は監訳者）の基本的解釈の一端を頭わにしてみたい。カントの認識批判の方法を特徴付ける「transzendental」という語には、認識批判が経験に先立ってなされるということを考慮して、かつては「先験的」という訳語が与えられることが多かったが（天野、安藤、梶田・高峯、篠田、高峯訳）、現在では「超越論的」という訳語が一般的になっている。「transzendental」を「超越論的」と訳す根拠は、大きく分けて二つある。まず第一版「序論」の transzendental の定義を引いた上で、二つの根拠を簡単に確認したい（第一版の定義に関しては、解釈が翻訳にそれほど影響を与えるわけではないので有福訳を提示する）。

諸対象に専念するというよりも、諸対象一般について

のわれわれのアプリオリな諸概念に専念するすべての認識を、わたしは超越論的と呼ぶ（六三頁）

Ich neme alle Erkenntnis transzendental, die sich nicht so wohl mit Gegenständen, sondern mit unsern Begriffen a priori von Gegenständen überhaupt beschäftigt. (A11)

第一の根拠は、カントにおける transzendental を、カント以前の transzendental との関連で理解する、というものである。この解釈をとる研究者として、ドイツ語圏では Gideon ^(四) Kriemeyer ^(五) Hinske ^(六)、日本では久保元彦 ^(七)、そして岩波カント全集の『プロレゴメナ』（第六巻所収）の訳者である久呉高之などがある。久呉によれば、「カント以前には「超越的」(transzendent)と「超越論的」(transzendental) : との間に意味上の差異はなく、中世以来、アリストテレスのカテゴリーを「超越する (transcendere)」ような概念・名辞に対する特徴づけとして、両語は区別なく用いられた」（『プロレゴメナ』解説、六二三頁）。「当初は「有」「一」「真」「善」といった存在者のあらゆる可能な区分を越える概念

に限定されたが、次第にルースに用いられるようになり、一八世紀では「存在者一般 (ens in genere)」あるいはそれに対応するドイツ語表記「物一般 (Ding überhaupt)」についての概念を指示するために用いられた。カントの同時代の哲学者たちも、諸対象の差異を超えてそれらに一般的に関係する種の問題、あるいはその学を特徴づけるために *transzendēt* という語を用いていた(同、六二三頁以下参照)。カントは、*transzendental* の定義の中に「諸対象一般 (Gegenstände überhaupt)」という語を含めることによつてこの伝統との関係を明示しつつ、その上で「諸対象一般」ではなく、それについての「アприオリな概念に専念する」という点に独自の規定を組み込んだ、というわけである。ところでこの解釈は、第二版で書き換えられた *transzendental* の定義の翻訳の仕方にも問題を提起する。カントは第二版で *transzendental* の定義を次のように書き換えている。

Ich nenne alle Erkenntnis *transzendental*, die sich nicht so wohl mit Gegenständen, sondern mit unserer Erkenntnisart

von Gegenständen, so fern diese a priori möglich sein soll, überhaupt beschäftigt (B25)

二つでは、第一版の定義のうち、「諸概念 (Begriffe)」が「認識様式 (Erkenntnisart)」に、「アприオリな (a priori)」が「それがアприオリに可能であるべきかぎり (so fern diese a priori möglich sein soll)」と修正されている。so fern diese 「対象」と「一般」との間に割り込んできているため、この文章において *Gegenständen* と *überhaupt* を関連付けて「対象一般」ととるかどうかについて解釈は分かれる。既存の翻訳で「対象一般」ととるのは、天野訳と安藤訳(篠田訳は *Gegenständen* と *überhaupt* を関係づけているが、「我々が一般に対象を認識する仕方」と訳している)であり、それ以外のものは *überhaupt* を *sich beschäftigt* に関係づけている。もちろんカントの *transzendental* をカント以前のそれとの関連づける研究者たちは、第二版でも「対象一般」と読むべきであると主張する。久呉はその理由として、「対象一般」ととらないならば「カントの *transzendental* は、純然たる新語として、伝統との一切の関係を断ち切られ」て、カント

自身が批判する、「言語における立法手段を僭する」という「絶望的手段」(A312/B368f)に訴えたことになってしま
うから、と説明している(同、六一九頁参照)。

transcendentalを「超越論的」と訳す第二の根拠は、カン
トの認識批判の方法の特徴づけに「超越する(transcendere/
transzendieren)」という意味が不可欠である、といものである。たとえばハイデガーは「存在者への純粹理性の超出(超
越 Transzendenz)」⁽⁷⁾に関わるという意味で transcendentalを捉
えているし、日本で初めて「超越論的」の訳語を提唱した
九鬼周造は transcendentalを「対象の超越性もしくは客観
性の認識に係する語」⁽⁸⁾と解釈した。

そのほか transcendentalな認識が関わるものは、単に経
験に先立つというよりは、経験を超越しながらも、経験と
断絶しているわけではない(つまり超越的(transcendent)で
はない)という理由で、transcendentalが「超越論的」と訳
されるべきだとする解釈があるが、有福や原の解釈はこれ
に属する。有福はその解説で、「超越論的」認識の内実と
して、まず「認識主観の態度・姿勢・態勢」への「反省」
という契機を第一に取り出している。とはいえ超越論的認

識は単なる主観への反省ではなく、「超越論的主観性(態
勢)」を確立することが、同時に、批判哲学の認識態勢を基
礎づけることであり、それがまた同時に認識対象の性格す
なわち対象性——つまりは超越論的客観性——を決定づ
ける」(下巻、五四〇頁)という事態に関わるとされる。そ
れゆえ認識主観の態勢として取り出される感性的直観の純
粋形式やカテゴリーは「たえず「経験的」なものと区別さ
れつつも、これと絶縁することはできず、これを包摂しつ
つ超越する」(同、五三四頁)。有福訳で transcendentalが「超
越論的」と訳される理由はここに見出されうる。

原訳の解説によれば「超越論的」とは、「認識対象と(主
観のうちにある原理と)のア・プリオリな連関にもとづく方
法論的概念」であって、これは「実験的」という概念と符
合するとされる。この解釈はすでに原の『カント哲学の体
系的解釈』で詳しく展開されている。⁽⁹⁾超越論的な認識が関
わるア・プリオリな契機は、客観対象との連関から遮断され
ているわけではない。それだからこそ超越論的は超越的
(transcendent)から区別される。このア・プリオリな契機は
「客観対象へ関係して「使用」され、「適用」されなければ

ばならない」(六二頁以下参照)。それゆえに超越論的方法は、アприオリな契機とその適用対象との連関関係をたどる手続きを含むのであり、「認識の主観能力で孤絶されて見出され、そのかぎりで仮説的であるにとどまるアプリオリ」[scアプリオリな契機]が、果たして、また如何にして認識対象と連関しうるかを経験の対象界で検察する」「実験的方法」(五七―五八頁)と符合する。原訳ではこのような解釈に基づいて *transzendental* が「超越論的」と訳されているわけである。

宇都宮は『『純粹理性批判』解説の手引き』のなかで *transzendental* の意味について、対象についての認識の仕方を説明するためには「われわれが現に個々の対象を認識している場面を離れ、その場面を超越する場所に視点を置かなければならない」(下巻、九一〇頁)と説明している。そのうえで「われわれが個々の対象を認識する場面は、経験の場面でもあるから、認識の仕方の説明は、いわば経験に先立ってなされることになる」として、これまで *transzendental* が「先験的」と訳されてきた理由を説明している。このように宇都宮は、*transzendental* を「先験的」と

訳す従来の邦訳の解釈の延長線上で「超越」の意味を見出している。また有福、原が(ハイデガーや九鬼と同様に)、超越論的な認識が関わるもののあり方に「超越論的」の語の由来を見定めている一方で、宇都宮は、認識様式の解明方法のあり方に、「超越論的」の語の由来を見ているといえるだろう。

最後に、新たな三つの翻訳が *transzendental* の定義の第二版での書き換えをどのように処理しているか確認しよう。原訳では、特に断りなく改訳版でも旧版でも *Gegenständen* と *überhaupt* を切り離して訳している(改訳版では「一般に」、旧版では「総じて」)。しかし有福訳ではこの箇所に長い注をつけて、*Gegenständen* と *überhaupt* とが関係づけられない旨を詳しく説明している(上巻、四一七頁)。つまり有福はこの箇所の解釈の問題を踏まえた上で、自覚的に「対象一般」説を退けているのである。注で有福はまず文法からして *überhaupt* は *Gegenständen* と関係づけられないとした上で、最後に「認識は、その根源に関しては超越論的と呼ばれ、いかなる経験においても見出されない客観に関しては超越的と呼ばれる」(Ref1 4851, Ak. XVIII

10)と「アприオリな認識は経験的な認識に対立せしめられ、アприオリな認識についての哲学は超越論哲学と呼ばれる。われわれが経験の諸対象に関してアприオリに認識するすべてのものは超越論的哲学のうちに存している」(Ref. 4890, Ak. XVIII 20)と、二つの覚書を引いて、「超越論的」と「対象一般」を結び付ける必要がないことを示している。有福は解説のカント解釈史のパートで Hmske の *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie* を紹介しつつも、その解釈の肝であるカントの「超越論的」とカント以前のそれとの関係づけには一言も触れていないし、Hmske の概念史的解釈という方法についても「木を見て森を見ざる危険も伴う」と批判的である。

岩波書店『カント全集』の同じ巻に収録されている『純粹理性批判』の解説と『プロレゴメナ』の解説とが、各々異なる「超越論的」の解釈を展開しているのは事態として面白い。私見を述べると、「超越論的」と「対象一般／物一般」との結びつきを切り捨てて、カント以前の「超越論的」とカントのそれとの関係を完全に度外視する解釈には疑問がある。というのも、「超越論的」をカント固有の

方法特徴づける一義的な術語と解釈するならば、カントが規定した認識の客観的妥当性から逸脱しているものに「超越論的」が付されている局面（概念の超越論的使用 (A238/B298)・時間の絶対的超越論的実在性 (A36/B53) など）を、単に例外的な事例として扱わざるを得ず、テキストの豊かさを切り詰めてしまうことになるからだ。『純粹理性批判』における「超越論的」という術語の揺れは、「対象一般についての概念」（カントにおいて、これはカテゴリーの定義項である）の捉えなおしという動的な過程と本質的に連関している。カントの〈形而上学の批判〉が、形而上学の欠陥を指摘するという意味での否定的な活動ではなく、理性能力の吟味、およびそれに基づく「本来の形而上学」(B33)の準備であるかぎり、批判の対象は必然的に二つの側面をもつことになる。「超越論的」にもこの二面性が認められるべきであり、この術語の用法の揺れのうちにこそ、カントの「批判」の遂行が見届けられるべきではないだろうか。

宇都宮訳では、第二版の翻訳で *überhaupt* が訳出されていない。そもそもこの問題に関与していないことを示すも

のだろう。

四 結論と提言

文学の翻訳者は「賞味期限のない翻訳というのはまず存在しない。翻訳と言うのはつまるところ言語技術の問題であり、技術は細部から古びていくものだからだ」と言う⁽¹¹⁾が、哲学の古典、わけても『純粹理性批判』のような著作の翻訳の場合、それはあまり意識されないのではないだろうか。それは、厳密な概念規定、厳密な論理に基づいて展開される『純粹理性批判』の文章が、一貫した訳語の選定と厳密な（逐語訳的な）翻訳を要求するため、原文を活きた日本語に書き直す、という課題が前面に出てこないからだろう。加えて初訳である天野貞祐訳が高い水準で（一貫した訳語選定と厳密な翻訳）という要求に応じ、長らくそれがスタンダードな翻訳の地位を保ち続けたために、基本術語の訳出に一定の規則が定まった、という事情がある。カントの論理を厳密に追おうとする翻訳、そして人口に膾炙

した訳語を用いようとする翻訳ならば、天野訳と同一の路線をとらざるを得ない原因がここにはある。

三つの翻訳を比較し、それぞれの特徴を浮き彫りにする作業のなかで、一層強く感じられるようになったことは、三つの翻訳が基本的には（天野訳以来の訳語を踏まえた厳密な翻訳）という同一の路線を辿っているということだった。検討した翻訳のうち二つは、約三〇年ぶりの新訳だが、これまでの翻訳を乗り越えるものというよりは、それらに並べられるもうひとつの選択肢という位置づけが相応しいように思われる。『純粹理性批判』の翻訳をめぐるこのような状況があるからこそ、約四〇年前の翻訳である原訳が、「改訳」という形で今、公刊されるということや、戦前の天野訳が一九七九年に再び講談社学術文庫に収録されるということが起こりえたのだろう。たしかに新訳には、訳語の選定に関する新たな工夫や、これまでになかったような豊富な注がある。しかし原訳の改訳版が、基本的な術語の訳出方法に変更を加えていないことから明らかなように、二〇三〇年の間で訳語に関する大きな変動はないし、注が豊富になることも本文の翻訳には影響を与えないのだ

から、これらはマイナーチェンジと呼ぶべきものである。

誤訳の修正という点に新訳の意義がある、ということはもちろん言える。しかし、三つの新たな『純粹理性批判』の翻訳の意義を、この点に見出す人はおそらくいない。それは、同じ誤訳がいつも繰り返されているからではもちろんなくて、『純粹理性批判』の研究水準がすでに一定の成熟度に達しているからだろう。

では今後『純粹理性批判』の新しい種類の翻訳があるとするれば、どのようなものが考えられるだろうか。訳語の選定に關していうと、今回検討した三つの翻訳が採らなかつた方法がまだ残っている。それは、カントが用いている術語の用法と、カントと同時代、及びそれ以前の哲學者たちの術語の用法との關連を徹底的に洗い出して、より適切な訳語を選定していくという方法である。岩波全集版の『プロレゴメナ』（久呉高之訳）は、この方法の徹底化の一例だが、『純粹理性批判』ではまだそういった翻訳はない。だがこれもまた本質的に新たなものとは言い難い。もし本質的に新しい試みがあるとすれば、それは翻訳の二つの極、読みやすさと厳密な訳出をそれぞれ先鋭化させるところに

成立するのではないだろうか。

『純粹理性批判』ではないが、読みやすさを徹底的に追求したカントの著作の翻訳が昨年公刊されている。光文社古典新訳文庫に収められている中山元訳の『永遠平和のために／啓蒙とは何か 他三編』がそれである。光文社古典新訳文庫は、「いま、息をしている言葉で、もういちど古典を」というモットーのもと、楽しく読める古典翻訳を目指すというユニークな試みで、収録されている作品は文学が中心だが、カントの他、レーニン『帝國主義論』なども収められている。中山元の翻訳は、カントの政治哲学と歴史哲学のアクチュアルな意味を讀者に読み取らせることを第一の目的としており、そのために、この目的の邪魔になりにかねない哲学用語の厳密な訳出を避けるという方法を採用している。例えば、「啓蒙とは何か」のなかで、*Verstand* も *Vernunft* も理性と訳され、「永遠平和のために」では、*transzendental* が「公法の条件を示す性格の」と訳される、といった具合である。その他、段落の内容が、段落の冒頭の小見出しによって提示されているなど、わかりやすさを追及した工夫がある。本文で厳密に訳出されていない哲学

用語は訳注や解説で説明されており、これがカントの他の著作を読むための「足掛かり」になっている。この翻訳は単に読みやすさを追求しただけではなく、カント哲学への導入の役割を担うものとして、新たな、そして意味のある試みといえるのではないだろうか。

もちろん、こういった試みが『純粹理性批判』の翻訳で容易になされるわけではないだろう。Verstand と Vernunft を区別しないことで理解が容易になる文脈と、その区別自体が主題となる文脈がある。カントの哲学用語を用いないで「啓蒙とは何か」を訳出すると言うことは、要するにこの論文とカントの名著『純粹理性批判』との連関を捨象するということから、『純粹理性批判』自体の翻訳で同じような試みがそのまま成功するかどうかは分からない。しかし『純粹理性批判』の新しいタイプの翻訳があるとするならば、一つの可能性はこのように、読みやすさを徹底的に追求した方向にあるのではないだろうか。

二つ目の可能性は、厳密な翻訳を徹底化するという方向で考えられる。カントの原文に即した訳出を心がけた場合、どうしても原文の提示というが必要になってくる局面

がある。例えば「ドイツ語は、解明 Exposition、説明 Erklärung、表明 Deklaration、定義 Definition という「ラテン語起源の」表現に対して説明 Erklärung という一語を持つのみである」(A730/B758 有福訳)という文章で、原語を翻訳に取り込まざるを得ない場合や、訳注で、これまでの日本語訳との訳し方の違いを、原文を提示しつつ説明するような場合である(有福訳ではこういった訳注が多い)。また文章の構造を忠実に写し取る翻訳は、それを原文と付きあわせてみることで意味を持つといえなくもない。この種の翻訳ならば、いつそのことカントの原文と日本語訳の対訳として公開したほうがよいのではないか。もちろんドイツ語の知識がない読者にとっては、対訳は意味を持たないが、有福訳の訳注での説明はすでに一定のドイツ語の知識をもつ読者を想定しているし、そのような仕方では厳密を期する翻訳ならば、対訳という形式を採った方が、読者に便宜をはかることになるはずだ。ラテン語の著作では、日本でもすでに対訳版の翻訳が出ている(『スコトゥス「個体化の理論」への批判』オツカム著／渋谷克美訳、知泉書館二〇〇四年)し、イタリアでは二〇〇四年に『純粹理性批判』対訳版が

出版されて、好評を博していると聞く (Immanuel Kant: *Critica della ragion pura. Testo tedesco a fronte a cura di Costantino Esposito*, Milano 2004)。たしかにこうした翻訳は読者層を限定することにはなるが、『純粹理性批判』原文読解の手引きとして翻訳が用いられていることは疑い得ない事実であり、この点に特化した翻訳が試みられてもよいのではないだろうか。書物の規模がかなり大きくなるという危惧はあるが、徹底的に読みやすい文章を目指す翻訳よりも、こちらのほうが実現する可能性が高いように思われる。

今後『純粹理性批判』の翻訳が出るとすれば、徹底的に読みやすさを追求したものか、対訳版が出れば、新たな試みとして面白いものになるはずである。これが、私が三つの翻訳を検討する作業から得たもう一つの結論である。

註

(一) これまでに公刊されている翻訳は、天野貞祐訳 (一九二一年、一九三一年、岩波書店『カント全集』第一、二巻をなす。一九二八年に改訳がなされ岩波文庫に収録される。その後一九七九年に講談社学術文庫に収録されたが絶版。『天野貞祐全集』(日本図書センター)

第八、九巻にも収録されている。現在は一穂社から復刻版が出ている)、安藤春雄訳 (春秋社、一九三二年『世界大思想全集』第二五巻、分析論までの翻訳)、榊田啓三郎・高峯一愚訳 (河出書房、一九五六・一九五九年、『世界大思想全集』第一〇巻)、篠田英雄訳 (岩波文庫、一九六一・一九六二年)、原佑訳 (理想社、一九六六・一九七三年、『カント全集』第四、五、六巻)、高峯一愚訳 (河出書房、一九七四年、新装版『世界の大思想』一五 カント(上)の六種類)。(二) 鈴木直『輸入学問の功罪』ちくま新書、二〇〇七年、一七七頁以下参照。

(三) カントからの引用は、アカデミー版カント全集の巻数 (ローマ数字) と頁数 (アラビア数字) を括弧内に記す。ただし慣例に従い『純粹理性批判』からの引用は A Ⅱ 第一版と B Ⅱ 第二版の頁数を記す。

(四) Abram GIDEON, *Der Begriff Transzendental in Kant's Kritik der reinen Vernunft*, Marburg, 1903.

(五) Hinrich KNITTERMEYER, *Der Terminus transzendental in seiner historischen Entwicklung bis Kant*, Marburg, 1920.

(六) Norbert HINSKE, *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie, Der dreißigjährige Kant*, Stuttgart, 1970.

(七) 久保元彦『超越論的批判と形而上学』『カント研究』創文社、一九八七年、所収。

(八) Martin HEIDEGGER, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Frankfurt am Main, 1929, 1965, S.24.

(九) 『九鬼周造全集 第七巻』岩波書店、一九八一年、四〇頁以下。

(一〇) 原佑『カント哲学の体系的解釈』東海書房、一九四七年。尚、この著作では 'transzendental' が「超越的」、'transzendent' が「超絶的」と訳されている。以下の要約では、混乱を避けるために原訳お

よび解説に合わせて前者を「超越論的」、後者を「超越的」に置き換えた。

(一一) 村上春樹「翻訳者として、小説家として―訳者あとがき」、スコット・フィッツジェラルド(村上春樹訳)『グレート・ギャッツビー』中央公論新社、二〇〇六年、所収、三三二頁。